

1. 既報までは主として嫌食をとりあげたが、本報では幼児の好むチューインガム（以下ガムとする）をとりあげる。嫌食児の大半が問題視するものは味・匂いである。ガムは味・匂いが濃厚なために、咀嚼時刻によっては嫌食の一要因になる恐れがある。そこでつぎのような仮説をたてる。①ガムを咀嚼した場合、ガム特有の味・匂いが他の食品の味・匂いを打ち消してしまう。②ガムを長時間咀嚼すると、唾液のためにガムは洗滌されて味・嗅覚は早く正常に復する。③教育ママの多い現在、わが子のガム咀嚼後の味・嗅覚の変化に気づいている親は案外多い。④青年期特に女子は男子より嗅覚が鋭敏になるが、女子青年はガム咀嚼後の味・嗅覚（味覚は嗅覚と協同して働く）の変化に気づいていない。

2. 仮説①②＝実験対象は小学校就学前児。試液は食塩水 22.5mm。サッカロース水 16.7mmを 1cc ずつをガム20分咀嚼後に、直後と3分置きに甘水、水、塩水（以下水は省略）塩、甘、水、水、塩、甘、甘、塩、水の順に、苺水は直後、5～10分間隔に試飲する。各児の試飲報告は色別に灰色上質紙に○を描かせる。仮説③④＝女子大・保専生 162名。幼稚・保育園児の保護者 377名。実験幼児の保護者22名に質問紙法調査をする。

3. 仮説①②④は立証されたが、③は覆えされた。結局、ガムは食事90分前には口外に出すと、味・嗅覚は正常に復するので嫌食の要因にはなり難い。さらに湯茶を飲むとよい。